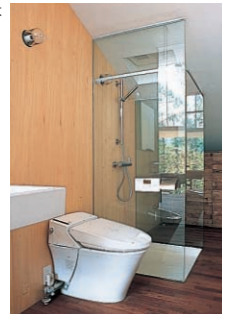


斜面で過ごす

武井誠+鍋島千恵

MAKOTO TAKEI + CHIE NABESHIMA

水まわり空間 トイレの奥は
シャワーブース

壇の家

設計：武井誠+鍋島千恵/TNA

H&H



上—リビングからテラス方向を見る。2階は多目的室
下—ダイニング 右はサンルーム



上—アプローチからエントランス方向を見る
下—東面全景

敷地は軽井沢の中心部から車で30分ほどに位置する別荘地の一角にある。急カーブの外側にある敷地は、接道を最小限にしつつ、短冊状に分割しているために、敷地境界線の後退を考えると、実際建てられる範囲はかなり限定される。その一方で、敷地面積は2,000m²を超え、140mもの奥行きを持つロケーションは、他の別荘が全く視界に入らない魅力的な場所であった。

敷地は道路からの斜面が敷地の先端までずっと連続しており、その高低差はおよそ50mもある。

斜面地におけるアプローチおよび玄関は、道路からなるべく高低差のない位置に設けるといった一般的な建物配置から、両隣の別荘も似たような配置になることが予想された。そこで、建物の床は斜面に沿って壇状にしていき、なるべく斜面の下の方に居場所をつくらうと考えた。地面がめくれ上がっているかのように屋根材を外壁まで葺き下ろし、窓も最低限の換気窓しか設けていない。道路からは玄関アプローチのスリットが見えるのみで、隣地からも室内の様子をうかがい知

ることはできない。

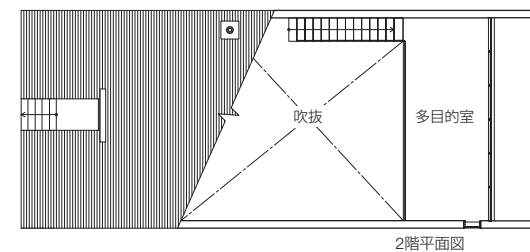
屋根から玄関を入ると、寝室と、トイレ・洗面室・シャワーブースの水まわりが左右に振り分けられている。機能的にあまり天井高さを必要としないこれらのスペースを天井の低い部分に配置し、リビングと連続させている。1壇下がって、ダイニング・キッチン、もう1壇下がって、ジャグジーが埋め込まれているサンルーム・テラスと、雑壇床になっている。それぞれの高低差は900mm前後であるので、ベッドに横になったり、ソファにもたれたり、ジャグジーにつかったり、といったように床付近で過ごしていると、他の壇に居る人の気配は気にならない。ひとつながりの空間でありながら、緩やかに区切られて過ごすことができる。

ロフトは構造的に柱の座屈止めの役割を果たしながら、その厚みを薄くすることで、景色を妨げないように軽やかに浮いている。この薄いロフトと片流れの天井は、それぞれの壇での過ごし方をなぞりながら、天井高さを断続的に変化させ、単調なワンルームにいろいろな居場所をつくり出している。

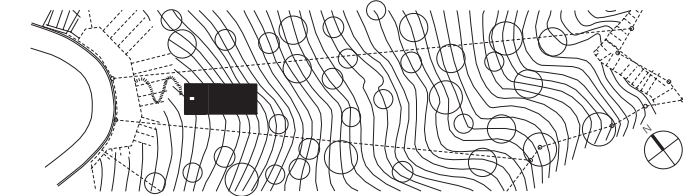
夜の照明は、建物に器具を取り付けることなく、人の居場所に明かりのたまりが出来るように、移動可能な光の球を床に点在させている。白い天井と壁全体が大きなランプシェードのようにになっている。

この家は“段”ではなく“壇”で出来ている。それは単に床にレベル差があるということではなく、収納や給排水設備、床暖房、照明といった暮らしすでの必要な機能をすべて含んでいる。“壇”は、斜面での新しい過ごし方を可能にしてくれる。*

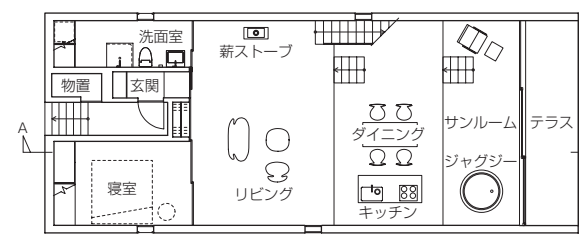
たけい・まこと—建築家/1974年生まれ。1997年、東京工業大学本由研究室研究生+アトリエ・ワン。1999年、手塚建築研究所。2004年、TNA設立、同代表。現在、東海大学・東洋大学非常勤講師。
なべしま・ちえ—建築家/日本大学生産工学部建築工学科卒業。1998年、手塚建築研究所。2005年、TNA共同主宰。主な作品：キバリの家（2005）、カラコンの家（2005）、輪の家（2006）、モザイクの家（2007）など。



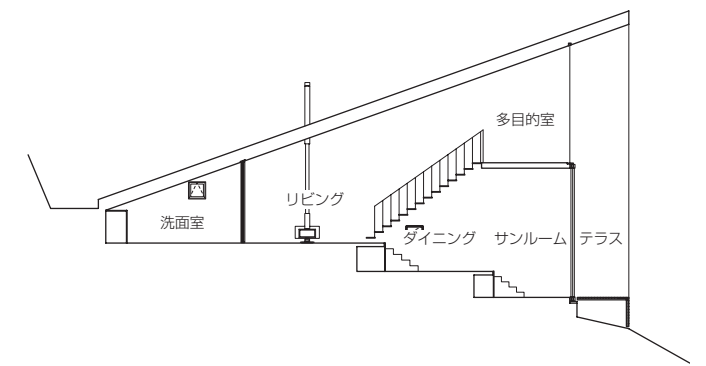
2階平面図



配置図 縮尺1/1,500



1階平面図 縮尺1/250

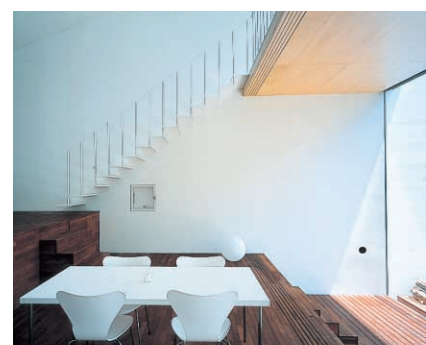


A-A' 断面図 縮尺1/250

■建築概要

名称：壇の家
所在地：長野県佐久郡軽井沢町
家族構成：夫婦+子供1人+犬1匹
敷地面積：2,659.32m²
建築面積：119.77m²
延床面積：128.51m²
規模：地下1階、地上2階
構造：木造
工期：2006.4～2006.10
設計：武井誠+鍋島千恵/TNA
施工：新津組

●INAX使用商品●便器：サティス D315/BW1



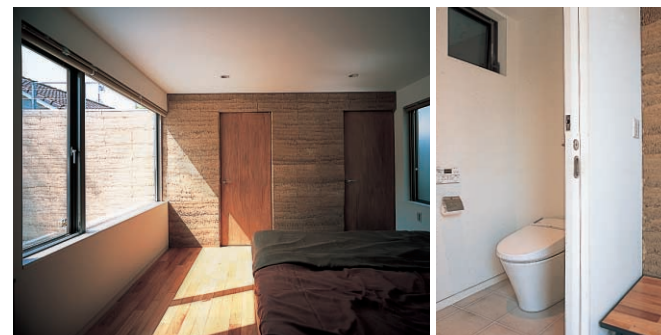
版築のある家

設計：金子智子建築設計室／金子智子＋寺坂久美



上—2階子どもスペースからリビングを見る
下—既存のスタジオ前から見る

左—主寝室
右—1階トイレ



版築とともに暮らす

金子智子
SATOKO KANEKO

この家は、東京でありながらまだ自然が残る住宅地に建っている。三方を住宅に囲まれているものの、北側は四季折々の花が咲く畑と豊かな森が広がっている。施主はこの敷地の南側に会社のスタジオを所有しており、環境を気に入っていたご主人は、地続きのこの敷地が売りに出た時に迷わず購入を決断された。敷地は理想的な整形地で、建物配置はさまざまなパターンが考えられたが、施主の一番の要望である「明るく暖かい家」を手掛かりに、南東に開きL字型の配置とした。敷地と道路の高低差が1.2mあったため、駐車場部分は切土し、1階をエントランスと主寝室、駐車場上部（中2階）をLDK、2階を子どもスペースに、レベル差を効率良く利用したスキップフロアでつなぎ、主寝室以外は仲の良い家族が大きいワンルームでお互いの気配を感じながら過ごせる空間とした。この駐車場の切土により発生する良質な土を捨ててしまうのが、とてももったいなく、施主が自然素材に興味を持たれていたこともあり、この土を利用してこの場所に

馴染む空間をつくれぬか、最初は単なる盛土的なランドスケープから検討を始めた。最終的には地形が隆起して出来た地層断面のように表現できる“版築”に行き着いた。“版築”の施工知識が全くなかったため、版築をつくっている左官職人を探し、協力を依頼した。彼も現場の土を利用した“版築”をつくるのは初めてだったため、配合や詰め込み具合など、試行錯誤しながら状況に応じて工夫を凝らしてもらった。すべて手作業のため、密度が詰まっている部分や荒土が入って粒状に固まっている部分ができ、結果的にそれが自然で豊かな表情となり、期待以上の仕上がりになった。

また建物へのアプローチは、北側道路と南側スタジオの両方から求められたため、北面、南面をあえて違う素材、色を採用し、違う表情を持たせた。北側は、森に同化するようガルバリウム鋼板の外壁を黒とし、南側は人工的なハードコートを含め、明るい空間になるように外壁も白系統でまとめている。そして“版築”が北側と南側の異なる面をつなぎ、内部



北東面全景

と外部の空間をつなぐ役割を果たしている。室内からは、森や畑、コートやヒメシヤラの木、内外各所に配置された“版築”を、さまざまな角度から見られるように開口を設け、またリビングや浴室の延長上にテラスを設けることによって、限られた空間以上の広がりを感じられるようにした。そのような中で、水まわり空間の器具もできるだけシンプルなものを選択した。*

かねこ・さとこ—建築家／武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。東京芸術大学美術研究科建築科修士課程修了。1995～96年、近代建築研究所。1997～2003年、早川邦彦建築研究室。2004年、金子智子建築設計室設立。
主な作品：京橋Nハウス（2002）、東京都立芦花高等学校（2003）など。（ともに早川邦彦建築研究室での担当）

■建築概要

名称：版築のある家
所在地：東京都町田市
家族構成：夫婦＋子供1人＋犬1匹
敷地面積：220.36㎡
建築面積：88.07㎡
延床面積：127.77㎡
規模：地上2階
構造：木造
工期：2006.12～2007.6
設計：金子智子建築設計室／金子智子＋寺坂久美（設計時協力）
施工：相隣建設、巧左官工芸

●INAX使用商品 ●便器：サティス D-315タイプ、紙巻器：FKF-32F

